

6 明治から現代へ

明治のあけぼの

1867(慶応3)年の大政奉還・王政復古によって、260年あまりにおよぶ江戸幕府の政治が終わりをつげました。翌1868年、元号が明治と改められ、明治政府は欧米の文化を取り入れながら国の近代化政策を始めました。

三浦にも、少しずつ新しい文化が入ってきました。1870(明治3)年には日本で4番目の白色レンガづくりの洋式灯台である城ヶ島灯台が、さらにその翌年には鯛崎灯台が作られ、これまでの薄暗いかがり火に変わって、ガラスのレンズを通して灯油を燃やした白色の光が海を照らしました。

1871(明治4)年には郵便取扱所(郵便局の前身)が松輪村に、1873年には海南村に開設され、これまでの飛脚夫や近くの農家の人が配達人として雇われました。彼らの制服は国が定めたもので、これが三浦で初めて見られた洋服だったと思われます。

1871(明治4)年、政府は「郷学校の設置に関する御触書」を出しました。翌1872年には、三浦で最初の学校である三崎郷学校が日の出町に開校しました。また、この年に発布された「学制」によって、1873(明治6)年に三浦に東岬学舎(三崎郷学校を改称)・西岬学舎・城ヶ島学舎(学舎とは



(三崎小学校所有)

今の学校のこと)など 14 もの学校が開かれました。いずれも個人の家や寺を校舎として使っていました。

1877(明治 10)年に横須賀警察署三崎分署が長井から六合^{むつあい}①の円照寺^{えんしょうじ}の境内^{けいだい}(現在の三崎 4 丁目)へ移りました。巡査は 2 名で、彼らの制服は郵便配達夫^つに次いで珍^{めづら}しい洋服姿でした。最初この警察署は現在の三崎公園のところに作られる予定でしたが、地元の人々の強い反対運動が起こり、隣村である六合につくられました。1883 年には海南町に、三崎では初めてのガラス窓を使った 2 階建庁舎が新築されました。

こうして明治になって新しい制度や仕組みが入って来たとはいえ、人々の暮らしは昔とさほど変わらずに営まれていました。それぞれの家庭で、行燈^{あんどん}からランプに変わったのは明治 20 年頃からでした。また、しばしばコレラが流行し、1886(明治 19)年には 120 名の患者のうち亡くなった方が 40 名もいました。そのため人々はコレラ予防のために、“三度の食事を蚊帳のなかでとった”とか、“梅干しを食べた”とか、“海南神社の世話人が秩父^{ちちぶ}の三峰^{みつみね}神社の御本尊をつれてきた”という当時の様子が現在でも伝えられています。

明治の小学校のしくみと校則

当時の小学校は下等小学と上等小学に分けられており、6 歳から 9 歳までは下等小学へ、10 歳から 13 歳までは上等小学へそれぞれ 4 年間通います。下等小学も上等小学もそれぞれ 8 級から 1 級までの段階があり半年ごとに上の級に進級するために進級試験に合格しなければなりません。また、毎月小試験も行われ、その成績が悪くても進級できませんでした。試験の結果は教室に張り出されて公表され、試験の結果が良ければ褒美^{ほうび}(賞状と賞金)がもらえました。

当時の授業は朝 8 時から 6 時までで、内容は算術(算数)・綴り字・仮名づかい・習字・修身^{しゅうしん}(道徳)・行儀作法などで、かつての寺子屋時代のなごりがありました。

また校則としては、

- 授業中に勝手に席を離れ・雑談したり、ものを食べたり、煙草^{たばこ}をのんではいけない。
- 校内では、水や墨^{すみ}を飛ばしたり、紙くずを散らかしたり、落書きをしてはいけない。
- 生徒の男女の別は、授業から食事にいたるまで同席はもちろんのこと、すべて校内で言葉をかわしてはいけない。
- 校則を破ったり、怠けたり、口論・けんかした者は正座 1 時間、再び破れば 3 時間、3 度破れば翌日午前 7 時まで。それでも改まらなかったら処分する。

など大変^{きび}厳しいものでした。

しかし、当時はまだ義務教育ではなく、授業料(明治15年ごろで月6銭ほど)もかかったので、途中でやめたり、家事の仕事の手伝いのため学校へ通えない子どもも多く、就^{しゅう}学^{がくりつ}率は低いものでした。特に女子の入学者は少なく、1880(明治13)年小網代村では学^{がくれい}齡^{れい}児童76人に対して就学者は男子18人で女子はわずかに2人の計20人に過ぎませんでした。まだまだ漁師や農民・女には学問はいらぬと言われた時代だったのです。

①六合(村) 当時の六合村は現在の原町・栄町・城山町・宮川町・晴海町・岬陽町・白石町・海外町・東岡町・向ヶ崎町・諏訪町・天神町と三崎町六合・三崎1丁目・三崎4丁目の一部を含む地域です。

明治初めごろの産業

明治になったとはいえ、農業も漁業もその経営や作業内容は江戸時代と変わらないものでした。当時の農作物は、麦・甘^{かんしよ}薯^{しよ}(さつま芋)・粟^{あわ}・陸^{りくとう}稲^{とう}・大^{だいず}豆^ずなどが自家用として作られていました。そうしたなかでも、宮川のナス・小網代のネギ・高円坊のダイコンなどは名前が少しは知られた作物でした。漁業では、大きな船でも長さ3間半(約6.4m)・幅6寸(約1.9m)で、この船で東は千葉の布^め良^らの沖合、西は伊豆半島から尺5御^{みく}蔵^{くら}島^{しま}まで漁に出ていました。そこで鮪^{まぐろ}・カジキ・鰹^{かつお}・鯖^{さば}などを捕っていました。いっぽう、小さな船では、沿岸でサザエ・鮑^{あわび}・海^え老^び・蛸^{たこ}などを捕っていました。こうしてとれた鮮魚や野菜などは、押送り船で京浜地区に運ばれて売られました。

1877(明治10)年に開かれた第1回内国勸業博覧会^{かんぎょうはくらんかい}(東京上野公園)への三浦からの出品目録を見ると、当時の三浦の特産物を知ることができます。

博覧会に出された三浦市の出品物

菊名村	海參(きんこ、干しなまこ)
上宮田村	メリヤス1組、はだか麦1升、火酒浸白えんどう、漁具絵図、漁具図
金田村	砂鉄、ふねくぎ大5本、ざる大小3
松輪村	黒菜1束、海苔1帖
毘沙門村	磨き砂3合、わかめ1束
三崎町	鮫油1升、海竹(のち海柳木に変更)、払子貝、イカ角2、魚突具3、かつおぶし3本、鮫びれ1組
六合村	ナス
城ヶ島村	心天草、ひじき各1袋、あわび3、さんご交砂3合、もぐり網、干しアワビ
小網代村	黒砂糖1斤(600g)
諸磯村	磯カネ1、干しトコブシ
下宮田村	刀鎌1、ワカメ切り鎌1、心天草かき
三戸村	えんどう1升、鶏冠草1袋
和田村	なたね1升、ごま種1升
高円坊村	ダイコン(木彫り)2本、ダイコン種子3合
林村	海塩1升(入江新田の海岸塩田より産出)

(編集委員作成)

おしょくり船(押送り船)

押送り船は、波を切るように舳先^{へさき}が細くできている船で、脚^{あし}の速い船。7～8挺^{ちよう}の櫓^ろによって漕ぐ船で、江戸時代以来使われていますが、明治時代には「生^{なま}舟^{ぶね}」と「活^いけ物^{もの}舟^{ぶね}」の2つがあり、「生舟」にはマグロなどの鮮魚を、「活け物舟」には塩^{しお}干^ひ魚^{かな}やエビ貝類を積みました。キハダマグロなら50本(約2000kg)くらい積めました。「生舟」の出発は夕方・「活け物舟」は午前10時頃で、いずれも翌朝の暗いうちに東京の魚河岸^{うおがし}に着きました。帰りの船には三崎の消費物資を積んできました。この船の乗組員は力自慢^{じまん}の若者が多く、明治20年ごろで東京への1往復の賃金が2円でした。当時2円あれば1か月生活できた時代です。しかし、これも明治40(1907)年頃には汽船や発動汽船の登場とともにその姿を消していきました。

三浦市の前身

1889(明治22)年に町村制が施行されると、これまで小さく分かれていた町や村を合わせて、三崎町(三崎町・六合村・城ヶ島村・小網代村・諸磯村)、南下浦村(菊名村・上宮田村・金田村・松輪村・毘沙門村)、初声村(下宮田村・三戸村・和田村・入江新田・高円坊村)の3つの町村にまとめられました。町村長の選挙も行われ、それぞれの役場を設けて政治にあたるようになりました。

交通・通信機関の発達

三浦の産業は、明治に入ってもさほど発達しませんでした。その大きな理由として、交通機関が依然として「おしよくり船」であり、それを利用できない人は馬車も通れぬ道を歩いたり、馬の背に荷物をのせたりして運ぶしかなかったことがあげられます。1881(明治 14)年に初めて三崎港に汽船が入り、東京と三崎が直接結ばれてスピードアップがはかれると、だんだん人と物の交流がさかんになってきました。また、1901(明治 34)年に乗り合い馬車が三崎～浦賀の間に開通し、1909(明治 42)年には三崎～長井～横須賀を乗り継ぎで連絡する馬車が開通しました。

乗り物の値段あれこれ(明治の後半)

汽船の運賃 東京～三崎 所要時間約 5 時間

東京発 AM 8:00 三崎着 PM 1:00

三崎発 PM10:00 東京着 AM 3:00

通行税とともに 1 等 42 銭 2 等 21 銭

乗り合い馬車 浦賀～三崎 馬は 1 頭立てで定員は左右 3 人ずつ

1 日 4 往復 所要時間 約 3 時間

乗車賃 42 銭(雨天時は 2 割増し)

人力車 浦賀～三崎 1 円 10 銭

鉄道運賃 横須賀～東京 39 銭

人夫の日給 50 銭

馬車や人力車があっても人々はほとんど歩いて行動していました。また、当時の東京と三崎を結ぶ汽船は魚を運ぶためのもので、乗客にとっては狭い客室の蒸し暑さと魚の臭いでなかなか大変な船旅だったといえます。

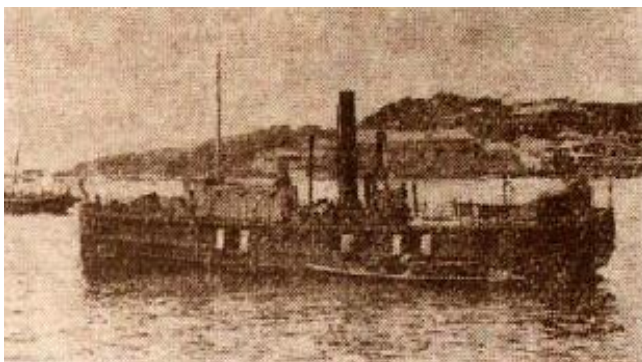
1888(明治 21)年に劔崎電信局で電話が開通し、さらに 1911(明治 44)年には三崎に初めて電話が開通(加入者が 13 名でスタート)するなど、通信機関についてもいよいよ近代的なしくみができあがってきました。

1910(明治 43)年には三崎町と長井村を送電区域にする三浦電気株式会社が、翌年には三崎製氷株式会社が設立され、魚市場の発展の基礎ができました。

こうして明治の終わり頃になって他都市との結びつきが強まると、三浦の産業も市場を獲得してだんだと発展してきました。特に漁業面では、汽船による東京への魚の輸送のときには氷を使うようになったため、“三崎”の名が東京では新鮮な魚の代名詞となり、三崎の魚は魚河岸^{うおがし}では高値で仕切^きられるようになりました。

南下浦や初声では、葉タバコの栽培や高円坊ダイコンをはじめとする蔬菜栽培^{そさい}がさかんとなり、南下浦ではミカンの栽培も始まりました。また、獲れた魚も魚商が発動機船で市場へ運び、野菜も汽船を使って東京へ出荷されるようになりました。

それとともに、都会から汽船に乗って多くの避暑客^{ひしよきやく}が汐湯治^{しおとうじ}(海水浴のこと)に訪れ、明治の後半から大正にかけて、風光明媚^{ふうこうめいび}な三浦の地にいろいろな文人も訪れてきました。



三崎－東京を結んだ三盛丸
(高梨健児氏所有)

三浦を訪れた文人たち

北原白秋

言葉の音楽師といわれ、美しい言葉を使って新しい感覚に満ちた詩を数多く作りました。

三崎にゆかりのある「城ヶ島の雨」は、その代表的なものの1つです。白秋は、1913(大正2)年に家族とともに向ヶ崎(三崎)に移ってきました。当時の作品には、「引橋の茶屋のほとりをいそぐ時　ほとほと秋は過ぎぬと思ひき」とあります。引橋周辺の風景に強くひかれていた白秋の姿をしのぶことができます。また、三崎小学校の校歌などにその足跡をみることができます。

斎藤茂吉

アララギ派^①の中心となって、多くの歌人を育てた人として知られています。1914(大正3)年、歌人茂吉が妻とともに乗り合い馬車にガタガタゆられながら、長井から引橋に向かっていったときの沿道の風景を表した作品に「まるくふくれし煙草ばたけの向ふ道　馬車は小さく隠ろひにけり」「ほくほくとけふも三崎へのぼり馬　栗畑こえていななきにけり」とあります。七曲りの坂を経て、引橋に向かうあたりには、煙草や栗畑が広がっていました。

その他の文人

引橋にひかれて作品『森の二時間』を書いた折口信夫・小説『桜の御所』を書いた村井玄斎・彫刻家の北村四海・美術評論家の岩村透・歌人の若山牧水・俳人の松本たかしなどが三崎を訪れています。

①アララギ派　1908(明治41)年に出された短歌雑誌『アララギ』を中心に活躍した大正・昭和の歌人のグループ。

大正時代の三浦

明治の終わりから大正の初期にかけて三崎の沿岸漁業は^{おうごんき}黄金期であり、また1つの転換期でもありました。この頃は、秋サバやイカの豊漁が続きました。また、これまで大型漁船に限られていたエンジンが沿岸漁船にも付けられはじめると、これを機に一本釣りの^て手漕ぎ船の動力化が進みました。こうなると漁場は拡大し、1月以降は大島^{はぶぐち}波浮口(ムツ・メダイ)、3～4月房総南端の^{めらせ}布良瀬(ムツ・キンメ・メダイ)、5月^{かもがわ}鴨川～^{ちくらおき}千倉沖(サバ)、6～7月大島(サバ)、7～8月新島(サバ)、9～10月大島(サバ)、10～12月相模湾(マグロ)というように、1年を通じて出漁するようになりました。一方1921(大正10)年には三崎町営魚市場が海南町に建設され、翌年には魚市場の^{みずあ}水揚げが300万円を突破するほどの盛況ぶりでした。こうして三崎の漁業は、沿岸漁業を主力として発展してきましたが、遠洋漁業はあまり見られませんでした。

農業も大正年間にダイコンの栽培がいっそう広まり、「三浦ダイコン」の名前がつけられたり、初声ではトマト栽培や鉄砲ユリの球根作りが導入されたり、初声や南下浦ではキュウリの栽培など都市向けの農業が少しずつ発展してきました。



仲崎の露天魚市場

(松崎貞夫氏所有)



相模房総海域図

(編集委員作成)

交通機関も馬車に代わって 1917(大正 6)年に乗り合い自動車(三崎～横須賀・3 円 50 銭・丁型フォード)が登場したり、1919(大正 8)年にはダイコンや魚の輸送に初めてトラックが用いられるなど、これまでの汽船に代わってだんだんと自動車輸送が行われるようになってきました。また 1913(大正 2)年には、三崎町に初めて電灯がつけました。こうして、産業や経済の面でも明るいきざしが見えてきました。

関東大震災

1923(大正 12)年 9 月 1 日午前 11 時 58 分、突然関東地方を襲^{おそ}った大地震によって、三浦のこれまでの発展の基礎がくつがえされました。美しい海岸線は隆^{りゅう}起^{うき}して岩^{いわ}肌^{はだ}をさらけだし、海水浴場や漁港施設は大きな損害を受けました。また、民家も全^{ぜん}半^{はん}壊^{かい}を含めて全家屋の 40%にあたる 1500 戸あまりが被害を受け、死者 61 名を出しました。しかし、正午というのに火災が出なかったことと、大きな津波の被害をまぬがれたことは不幸中の幸いでした。

三浦の人々は、この困難のなかでも震災の復^ふ興^{こう}をめざして力強く立ち上がり、これを機会に海岸の埋め立てや漁港の整備・魚市場の拡張工事に取り組みました。

この時期は、三崎が日本を代表する大漁港として発展するための出発点でもありました。



乗り合い自動車



西野埋め立て

(松崎貞夫氏所有)

震災あれこれ

震災を経験した人の話によると、「三崎港に水がなくなり、干上がった海底が丸見えになった。城ヶ島から三崎まで歩いて渡れただろう」「城山の高台に避難して何日も野宿した人々は、干上がった磯から、アワビ・サザエ・トコブシを取ってみんなで分け合った」「高抜海岸の磯という磯は露出し、沖ノ島へ歩いて行けそうだった」と言われるほど地形の隆起(およそ1.4m)が見られ、三浦の海岸の景観は一変しました。

このほか「江ノ島が沈んでなくなった」とか「朝鮮人が暴動を起こす」「朝鮮人が井戸に毒を入れる」などといううわさが流れ、人々は動揺し、竹槍を作って自警団を組織したとされています。

三浦の震災被害状況

	三崎町	南下浦村	初声村	合 計
全壊家屋	234 戸	160 戸	138 戸	532 戸
半壊家屋	408 戸	328 戸	285 戸	1021 戸
死 者	43 人	8 人	10 人	61 人
傷 者	82 人	12 人	38 人	132 人

(1920 年当時、三浦市全地域の戸数人口 3,818 戸、20,780 人)

(編集委員作成)



震災前の水位を示す

(松崎貞夫氏所有)

昭和時代 戦前の三浦

昭和の三浦の発展は、大打撃を受けた関東大震災の復興から始まりました。しかし、復興の目安がたったやさきに、1932(昭和7)年の仲^な崎^{さき}と花^は暮^{なくれ}および1936(昭和11)年の城ヶ島と大火事が相次ぎました。それに追い打ちをかけるように、戦争という多難な時期を過ごさなければなりませんでした。

三崎での震災による漁港の復旧は1928(昭和3)年には終わり、翌年には三崎魚市場が西野の埋立地に新設されるなど漁港整備は少しずつ進められました。

特に「マグロえさ」としてのイワシの豊漁は、他港の漁船を三崎に集める大きな要因となりました。昭和の初めには、全国で1300余隻^{せき}と言われたマグロ延^{はえ}縄^{なわ}船のうち230～240隻が三崎港に集中しました。和歌山・徳島・高知・三重・宮城・岩手・山形などから、大型動力漁船が相次いで三崎に移住してきたのです。彼らは三崎を根拠地にして、東太平洋やマリアナ沖などにまで進出しました。

こうして三崎港は、全国でも指折りの遠洋漁業の基地として、その名をとどろかせるようになりました。



マグロ船の出航

(柳井晋氏所有)



魚市場へのマグロの水揚げ

(松崎貞夫氏所有)

しかし、大型漁船を所有して操業する資本力のない地元漁業者は、相変らず伊豆大島沖までの範囲での小型動力船で操^{そうぎょう}業しなければなりませんでした。それでも、1937(昭和 12)年には三崎町に住む遠洋漁業者のみによって三崎町地元遠洋漁業者組合が結成(在籍船 34 隻・平均 86 トン)されました。

沿岸漁業では金田湾の定置網漁業がさかんになり、煮干しやメザシが大量に加工されて京阪神にまでその市場が広がりました。

農業でも、南下浦や初声では京浜地区への市場の拡大にともなったダイコンを中心として野菜類・葉煙草・輸出用ユリの栽培が行われる一方、三浦特産のスイカも 1935 年頃から増えはじめ、近^{きんこう}郊農業としての発展を見せるようになってきました。

好況を続ける魚市場など活発な経済を反映して三崎では、1934(昭和 9)年の近代的な町役場建設をはじめ、1935(昭和 10)年に上水道施設が整備されたり銀行の支店が建てられたりするなど、産業経済の面で大きく発展しました。

戦時下の三浦

1931(昭和 6)年の満州事変から始まった中国との戦争の長期化は、やがて三浦の経済や暮らしにも深刻な影響を及ぼしてきました。戦争が激しくなってきた 1941(昭和 16)年以降に大型優秀漁船が次々と海軍に徴^{ちようよう}用されて、三崎の遠洋漁業はしだいに衰えてきました。

三崎地元遠洋漁業組合加入船は、1941(昭和 16)年に 1 隻・1942 年 11 隻・1943 年 9 隻・1944 年 8 隻と合計 29 隻が徴用されて日本近海の哨^{しやうかい}戒(敵の襲撃の警戒)や南洋群島間の輸送・連絡にあたりましたが、敗戦までにその 7 割の 20 隻が沈没し、乗員のほとんどが戦争の犠牲^{ぎせい}になりました。敗戦のときには組合に属する漁船は、老朽^{ろうきゅうか}化した小型漁船が 12 隻に過ぎませんでした。また沿岸・沖合漁業も、1937(昭和 12)年ごろからは燃料油や漁^{ぎようもう}網・綱^{つな}の原料である木綿・麻など生産資材が手に入りにくくなる一方、

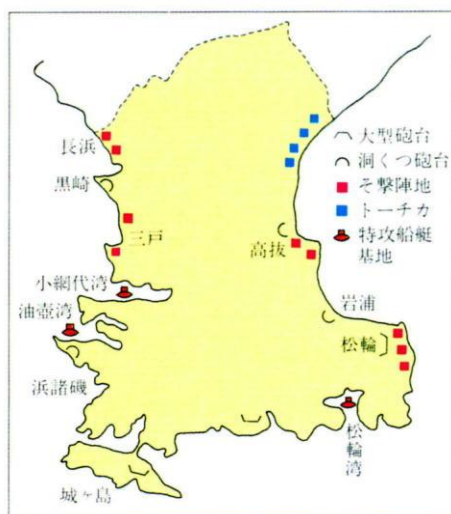
若い男性も兵隊にとられて老人に任されるようになりました。さらに戦争が激しくなると漁場が戦場となり、1945(昭和 20)年には新島浦や伊豆大島で操業中の三崎の漁船が多数の戦闘機に銃撃されたり、沿岸の漁船も襲撃されるようになりました。

こうして戦争の終わり頃には、わずかに手漕ぎの船で、空襲警報の合間に沿岸近くで漁をするに過ぎないほどになりました。そのため三崎魚市場の水揚げ量は、戦前の最高 35904 トン(1937 年)に比べてわずか 1770 トンに激減しました。

1941(昭和 16)年の農作物作付け制限規則によってスイカの作付けが禁止され、それに代わって米・麦を主として甘藷・馬鈴薯・豆類の作付けが強制されたため、農業で発展を見せていた園芸栽培農業は衰えていきました。

三浦半島は、首都東京の防衛のための重要な地域であることから東京湾要塞地帯とされ、三崎城ヶ島・劔崎に大きな砲台が設置されてきました。

やがて、アメリカ軍の攻勢によって太平洋戦争の形勢が悪化すると、1945(昭和 20)年にはアメリカ軍の日本本土上陸・本土決戦を想定して、小網代・油壺・松輪の各湾に特殊潜攻艇(海龍と呼ばれる小型の潜水艦。魚雷を積んで敵を攻撃したり、自分で敵艦に体当たりする)や特攻舟艇(震洋と呼ばれるベニヤで作ったモーターボート。前方に爆弾を積んで敵艦に体当たりする)の基地が設けられるようになりました。

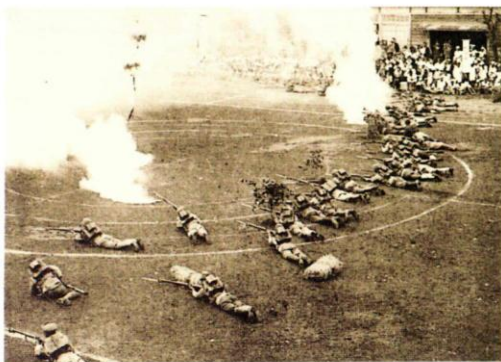


三浦市内の旧軍基地

戦争と子どもたち

1941(昭和 16)年にこれまでの小学校が国民学校(初等科 6 年・高等科 2 年)と改められると、小学校でも戦争への協力体制が作られました。儀式や学校行事が重視され、の宮^{きゅうじょうようはい}城遙^{こうきよ}拝(天皇の住む皇居の方角に向かって最^{さい}敬^{けい}礼^{れい}を行う)から団体行進・駆け足訓練・木^{ぼく}銃^{じゅう}をかついでの軍事教練や女子は救護訓練・看護訓練などをさせられました。

三崎小の『八十八年の歩み』によれば、三崎町でも小学校 3 年生以上は少年団が組織され、「銃^{じゅう}後の守り」と食糧増産にかりだされました。高等科(今の中学 1・2 年生)の男子生徒は防^{ぼう}空^{くう}壕^{ごう}掘りに、女子生徒は火薬の原料になるカジメ(海草)の採取(カジメから取り出したカリ塩が、1940～41 年ごろから爆薬の原料に使われた)と乾燥作業へと動員されました。



戦前の運動会の 1 種目 (模擬戦)



戦前の運動会の 1 種目 (敵機襲来)

(松崎貞夫氏所有)

漁船の出 征

1937(昭和12)年に日中戦争が始まりましたが、その年の12月には南京^{なんきん}を攻略して戦線はさらに揚子江^{ようすこう}(長江^{ちやうこう})をさかのぼって広がっていきました。この広くなった戦場に物資を補給^{ほきゅう}するために、多くの小型発動機漁船が徴用^{ちやうよう}されるようになりました。

1938(昭和13)年には三崎からも徳栄丸^{とくえいまる}(日の出・11トン・40馬力)、兵助丸^{ひょうすけまる}(白石・12トン・40馬力)、金七丸^{かねしちまる}(海外・13トン・50馬力)が船長以下ほとんど乗組員ごと徴用され、広島県宇品の暁^{うしな}部隊^{あかつきぶたい}(陸軍の船舶部隊)に編入されたうえ、乗員は軍属^{ぐんぞく}(軍人以外で戦争に参加する人のこと)の辞令^{じれい}を受けました。そして上海^{しやんはい}まで独航^{どくかう}して、現地で神奈川・静岡二県徴用漁船団として揚子江(長江)を上下して戦争の物資補給の輸送任務にあたりました。1940(昭和15)年の秋には徴用は解除されましたが、兵助丸は1938(昭和13)年8月21日に砲撃を受けて沈没しました。

太平洋戦争が始まると、遠洋漁船・大型沿岸漁船とさらなる徴用が行われて戦争に参加させられ、船も人も大方はそのまま消息^{しやうそく}を絶ってしまいました。そうした中で、1944(昭和19)年2月に、乗員7人とともに徴用された三崎の第二兵助丸(33トン)は、他の2隻とともに国の方から戦場^{げきちん}で撃沈^{げきちん}されたものと思われて全員戦死の公報^{こうほう}が発表されましたが、終戦から6年目の1951(昭和26)年に、南洋マリアナ群島のアナタハン島に流れ着いて自給自足の生活をしていた20人がアメリカ軍に救出され、その年の7月6日にアメリカ軍の飛行機で日本へ生還^{せいかん}するという出来事もありました。

1943(昭和 18)年ごろに戦^{せんきょう}況はどんどん悪化して金属が不足すると、子どもたちも大人と一緒に^こなって 11 万枚もの硬^{こう}貨(銅貨・白銅貨・銀貨)を回収したり、文^{ぶん}鎮^{ちん}の供^{きょうしゅつ}出にも協力しました。この頃になると子どもたちのお菓子もなくなり、甘いものといえ^{かん}ば甘^{しよ} 藷^{かぼ}・南^{ちや} 瓜^や・さとうきびの茎などで、それを食^がべて我^{まん}慢^{まん}していました。

戦局のさし迫った 1945(昭和 20)年になると、4 月から国民学校初等科を除くすべての学校の授業の 1 年間の停止が決定され、生徒・学生たちの勤^{きん} 勞^{ろう} 動^{どう} 員^{いん}の体制が徹^て 底^{つてい}されました。南下浦小学校の校舎も、アメリカ軍上陸に備えて配置された日本軍の兵隊の兵舎として利用されたりしました。相模湾へ連合軍の上陸が噂^{うわさ}されると、一般の市民も竹^{たけ} 槍^{やり}でこれを防ぐ本土防衛対策も考えられました。

さらに三崎町では町長や在^{ざい} 郷^{ごう} 軍^{ぐん} 人^{じん}(現役を退職した軍人)・警察署長などが、県の意向^{いこう}を受けて警察の一室でひそかに、この町の老人や女・子どもを長野県へ集^そ 団^{かい} 疎^そ 開^{かい}させる計画をねったと言われています。これによると小学校高等科児童(今の中学 1・2 年生)は町にとどまって郷土防衛隊に加わって在郷軍人や警察官とともに主として弾丸運びにあたり、さらに疎開は長野県まで 10 日間かけて歩いて行く予定だったということです。

小学生の勤労働員(三崎小学校)

- ① 戦車・飛行機^{じゅんかつゆ}の潤^{じゅん} 滑^{かつ} 油^ゆとするためのヒマの栽培と採^{さい} 取^{しゅ}
- ② 洋服^{ぬのじ}の布地とするためのカラムシ(麻の一種)とり
- ③ 馬のえさの草刈り
- ④ 三崎小学校区の農家全体の麦畑の麦踏み
- ⑤ 城山の竹^{たけ} 藪^{やぶ}の開^{かい} 墾^{こん}(開いた畑に粟と小麦がまかれ、卒業式の祝^{もち}い 餅^{もち}とパンになった)

戦後の復興

1945(昭和 20)年 8 月 15 日正午の「ポツダム宣言」の受^{じゅ}諾^{だく}を告げる昭和天皇のラジオ放送で、満州事変に始まる 15 年にもおよぶ長い戦争が終わりました。

三浦市では、この戦争で 20 代の若者を中心に約 1000 名もの戦^{せん}没^{ぼつ}者^{しや}を出し、経済的にも大きな痛手^{いたで}をこうむりました。こうしたなか、アメリカを中心とする連合国軍の占領のもとで全国的に農地改^{かい}革^{かく}や民主化政策が進められました。三浦でも 1946(昭和 21)年から行われ農地改革では 266ha 余り(1950 年三浦市農地総面積 1184ha)の農地を地主から国が買い上げて、改めて小作人に安く売り渡されました。また、政治の民主化として地方自治が進められ、これまで町村議会から推^{すい}薦^{せん}されていた町村長を住民が直接選挙することになり、1947(昭和 22)年 4 月、三崎町長に松崎定治・南下浦町長に新倉誠一・初声村長に山田孝三郎がそれぞれ選ばれました。

産業面でも、戦後の食糧難解消のために政府がとった漁船建造奨^{しょう}励^{うれい}政策のもとで遠洋漁業用マグロ・カツオ大型漁船も多く作られ、三崎魚市町水揚げ量も遠洋漁業を中心に 1949(昭和 24)年には 32419 トンに達し、目覚ましい復興を見せました。

1953(昭和 28)年末に始まったアメリカの南太平洋海域(ビキニ島周辺)での原^{げん}水^{すい}爆^{ばく}実験によって、翌年 3 月に焼津港所属の第五福竜丸が「死の灰」を浴びて被^ひ爆^{ばく}しました。三崎港でも 3 月 26 日に帰港した第十三光荣丸から強い放^{ほう}射^{しゃ}能^{のう}が検出され、漁^ぎ獲^{よく}物^{ぶつ}48.75 トンすべてが廃^{はい}棄^きされました。さらに 4 月から 12 月にかけて帰港した遠洋漁船合計 158 隻からも相次いで放射能が検出され、合計 150 トン(当時の価格で 10 億円)もの漁獲物が廃棄されました。この事件は「原爆マグロ」として社会に大きな衝^{しょう}撃^{げき}を与え、一時期マグロ類の価格^{ぼうらく}は暴落して取り引きはほとんど停止し、三浦の漁業にも深刻な影響を与えました。

こうしたなかで漁業と密接な結びつきのある三崎の人々は、1954(昭和

29)年4月20日に魚市場でアメリカの原爆実験に反対して町民大会を開き、不安と怒りのなかで大会宣言^{せんげん}を決議して「(1)公海自由の確保 (2)治療^{ちりょう}・生活費の完全保障 (3)災害保障の完全実施 (4)原爆の禁止」を訴えました。

農業では戦争中からの作付け統制もしだいに解除されて、スイカ・キャベツ・トマト・レタスなど都市向けの商品作物を主体とする近郊農業が再び中心になってくるようになりました。

また、三浦半島には明治のころより東京湾要塞^{ようさい}司令部が置かれて厳^{きび}しい監視が続けられていましたが、戦後になると東京や横浜の人々を中心に手近なレクリエーションの場として、城ヶ島や油壺には観光バスが多く来るようになりました。

新制中学校の誕生

学校教育面でも大きな改革が行われ、これまでの国民学校から小学校6年間および中学校3年間の義務教育の新しい体制に変わりました。三浦でも1947(昭和22)年に、三崎・南下浦・初声の3中学校がスタートしました。

開校当初は独立した校舎はなく、旧軍隊の施設を使用したり近くの小学校に間借りするなどしてその場をしのぎました。

校舎も大変不足していたため、午前番・午後番の2回に分ける二部授業で行われました。机や椅子^{いす}はもちろんのこと、教科書やノートも十分にそろわないなかでの授業でした。

新制中学校は当時週5日制で、農業の忙しい時期には1週間前後の農繁^{のうはん}休業をとる学校もありました。服装は今のようには制服はなく、質素な身なりをしていました。また、高校進学を希望する生徒はさほど多くありませんでした。

開校当初の初声中学校(創立30周年記念誌より)

初声中学校(元横須賀海軍通信隊初声分遣^{ぶんけんたい}隊の兵舎)は、初声村の北端に位置しているため生徒の通学路に問題があった。三戸や下宮田の生徒は4キロ余^{あま}りの道を登校しなくてはならない。しかも生徒の服装といえば、国防^{こくぼう}服に戦^{せん}闘^{とう}帽^{ぼう}そして下駄^げ履^たきといういでたちであった。

教室は6学級分あったが、教室とは名ばかりで机や椅子などはほとんどなく床に座らせ、ミカン箱が机の代りだった。備品と言え、古びたオルガン1台と磨り減ったガリ版ぐらいであった。教科書は全くなし。後になって配られはしたものの、3人に1冊とか5人に1冊といったありさま。しかもその教科書は、新聞紙を八つ切りにしたような薄っぺらなパンフレット程度のものでした。学用品も極^{きよくど}度に不足し、ノートはおろか習字用の半紙さえ事欠くほどでした。

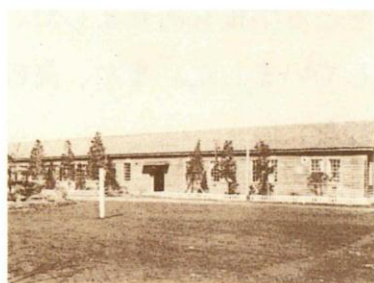
授業の方も、1・2・3期生は毎日何時間も校舎内外の整備作業(トロッコを押したり、埋め立てをしたり)に追い使われて授業も満足にできず・・・。



昔の三崎中学校



昔の南下浦中学校



昔の初声中学校

(各中学校所有)

三浦市の誕生

三崎町と南下浦町および初声村は、古くからの結びつきが見られました。3町村はともに三浦半島の南端部にあって、人情・風俗・習慣などで多くの共通点をもっていました。地理上も隣接し、容易に結びつける条件にありました。

1953(昭和 28)年の町村合併促進^{がっぺいそくしんほう}法の施行によって、1955(昭和 30)年1月1日に生産と観光の町の旗^{はたじろし}印とし、半島の開発と住民の福祉増進をめざして2町1村が合併し、三浦市が誕生(合併当時、面積 30.39km²・人口 35166 人・戸数 6996 戸)しました。



旧三崎町役場

(高梨健児氏所有)



旧南下浦町役場

(松崎貞夫氏所有)

城ヶ島大橋の完成

1955(昭和30)年1月1日に誕生した三浦市は、その後、市民の大きな夢であった城ヶ島大橋を1960(昭和35)年に完成させました。漁港整備や観光事業を大きく発展させるなか、城ヶ島大橋は新生三浦市のシンボルとなりました。

この大橋の架^か橋^{きょう}工事は、3年の歳月と7億余円の巨費をかけて完成されました。橋は、海橋部分の長さ575m・幅員11m・高さは満潮時で21mとなり、当時東洋一の箱桁^{はこげたはし}橋として多くの注目を集めました。

※箱桁橋…橋下が箱状の橋のこと



完成間近の城ヶ島大橋（高梨健児氏所有）

三 浦 の 歴 史

	三浦の出来事	日本の主な出来事
旧石器時代	水谷戸遺跡、大畑遺跡	
縄文時代	大浦山遺跡、三戸遺跡、諸磯遺跡	
弥生時代	赤坂遺跡、大浦山遺跡、遊ヶ崎遺跡	<u>239 邪馬台国が魏に使いを送る</u>
古墳時代	才京込遺跡	
飛鳥時代	大椿寺裏山古墳	<u>645 大化改新が起こる</u>
奈良時代		
平安時代	<u>『日本書紀』に「三浦」（御浦）の地名が出てくる</u> 神宮寺を行基が開くと伝えられている	710 平城京に都を移す 745 大仏の建立 794 平安京に都を移す
鎌倉時代	866 海南神社できる <u>天養院の薬師如来像がこの頃つくられる</u> 1063 平太夫為通に三浦郡が与えられる 平為継も源義家に従う	1051～1062 前九年の役 1083～1087 後三年の役
室町時代	1180 衣笠城が落城する	1192 鎌倉幕府ができる 1221 承久の乱
戦国時代	1213和田の乱（和田義盛亡びる） 1247 宝治の乱（三浦氏亡びる） 1319～23 新井城できる 1335 三浦時継が三浦の地を与えられる	1333 鎌倉幕府が亡びる 1334 建武の新政
江戸時代		1467 応仁の乱

	1494 三浦道寸が新井城の城主となる 1516(1518)三浦道寸が北条早雲に亡ぼされる 1590 三浦半島が徳川家康の領地となる 三崎が天領となる 1678 城ヶ島西山に「灯明台」ができる 1708 「入江新田」の開発が始まる 1811 会津藩が江戸湾警備にあたる 1847 海防陣屋が作られる	1590 豊臣秀吉が北条氏を滅ぼし、全国を統一する 1603 江戸幕府が開かれる 1825 外国船打払令 1853 ペリーが浦賀に来る 1867 大政奉還
--	---	--

	三浦の出来事	日本の主な出来事
明治時代	1870 城ヶ島灯台できる 1872 三崎郷学校が日の出町に開校 1877 横須賀警察署三崎分署が長井から六合の円照寺へうつる 1881 東京～三崎間が汽船で結ばれる 1886 コレラが流行する	1868 明治維新 1872 学制の發布
大正時代	1889 町村制が施行され、三崎町・南下浦村・初声村できる 1901 三崎～浦賀間に乗り合い馬車が開通	1894 日清戦争 1904 日露戦争
昭和時代	1913 三崎町に初めて電灯がともる 1917 三崎～横須賀間に乗り合い自動車が開通 1921 三崎町営魚市場が海南町に建設される 1934 最初の水道がはじまる 1941 これ以降、大型優秀漁船が海軍に徴用される 1945 小網代湾・油壺湾・松輪湾に特殊潜攻艇や特攻舟艇の基地ができる	1914 第一次世界大戦はじまる 1923 関東大震災おこる 1937 日中戦争はじまる 1941 太平洋戦争はじまる 1945 「ポツダム宣言」を受諾し、終戦 1946 農地改革はじまる

平成時代	1947	町村長を住民が直接選挙をする 三崎・南下浦・初声の3中学校が創立される	1947	日本国憲法が施行される
	1954	「原爆マグロ」事件が、三浦の漁業に影響を与える 三崎魚市場で、原爆実験に反対する町民大会が開かれる	1951	サンフランシスコ講和条約が結ばれる。
	1955	2町1村が合併し、三浦市が誕生する	1953	アメリカ合衆国がビキニ島で原水爆実験を行う
	1960	城ヶ島大橋が完成する	1960頃	高度経済成長期はじまる
	1966	上原中学校が創立される 京浜急行が三浦海岸まで延長される	1972	沖縄が返還される
	1973	毘沙門地区にし尿処理として衛生センターが完成する	1973	オイルショックがおこる
	1974	長野県須坂市と姉妹都市を結ぶ	1979	日中平和友好条約が結ばれる
	1975	京浜急行が三崎口まで延長される	1991	湾岸戦争がおこる
	1991	毘沙門地域にゴミ処理施設として環境センターが完成する	1993	ヨーロッパ連合の発足
	1991	三浦海業公社が設立される		
	1992	オーストラリアのウォーナンブルと姉妹都市を結ぶ		
	1997	潮風アリーナが完成する		
	2001	うらりが完成する	2008	北京オリンピック開催
	2009	チャッキラコがユネスコ無形文化遺産に登録される	2011	東日本大震災
	2012	海洋教育をはじめ 「三浦ツナ之介」がデビューする	2013	東京オリンピック・パラリンピック開催決定
	2014	三崎中学校・上原中学校が統合し、新三崎中学校が開校 「みうらん」がデビューする	2014	消費税が8%になる
	2017	三浦市・横須賀市の消防活動の広域化	2016	オバマ大統領が広島訪問をする イギリスのEU脱退表明 リオデジャネイロオリンピック開催

令和時代		2019 元号が令和に変わる
------	--	----------------

【三浦市のご当地キャラクター紹介】



みうらん



三浦ツナ之介

プロフィール

- ①約1000本が咲く三浦海岸の「河津桜」の妖精（女の子）
- ②三浦海岸の砂浜と三浦大根が大好き。
- ③河津桜が咲く早春が活動期に見えるが、夏にはアロハシャツを着てビーチを闊歩している。
- ④三浦海岸の魅力を世に広めるため、風に乗って活動している。
- 【住 所】 小松ヶ池（河津桜の群生地）
- 【誕生日】 立春（河津桜が芽吹く頃）
- 【性 格】 放浪癖がある（特に強風時）
- 【趣 味】 風に乗って三浦海岸のイベントに出かけるのが大好き。特に「三浦海岸桜まつり」「三浦海岸納涼まつり花火大会」「どっとこいセール」が毎年の楽しみで、友達の三浦ツナ之介くんを誘って出かけています。
- 【好きな食べ物】 三浦市産の水産物・農産物
- 【好きな場所】 三浦海岸の砂浜、小松ヶ池、金田湾の朝市

プロフィール

- ①三浦一族の鎧を着ることで陸に上げれるようになった「まぐろ」
*まだ慣れていないので、陸上歩行は時間制限もある
- ②子供好き
- ③疲れると横になって目を開けたまま寝る
- 【住 所】 三浦三崎漁港
- 【誕生日】 10月10日（まぐろの日）
- 【性 格】 放浪癖がある（特に強風時）
- 【趣 味】 三浦市内の祭りやイベントを見に行くこと。特に「三崎港町まつり」「三崎まぐろ鉄火巻き大会」「道寸祭り〜笠懸（かさかけ）」「みうら夜市」「チャッキラコ」が毎年の楽しみで、友達の松輪サバくんに誘われて海から見ています。
- 【好きな食べ物】 三浦市産の水産物・農産物
- 【好きな場所】 三浦海岸の砂浜、小松ヶ池、金田湾の朝市

【三浦市チャッキラコ】

チャッキラコとは、毎年1月15日の小正月に三浦市三崎の仲崎・花暮地区や海南神社で、豊漁・豊作や商売繁盛などを祈願する女性のみで踊られる民俗芸能の一つです。その起源は江戸時代まで遡り、『三崎志』（宝暦6年（1756）刊行）の年中行事の項に「○初瀬踊一名日ヤリ十五日女兒集り踊ル」とあるので約250年前から伝承されてきたことが伺えます。



奉納の様子

（文化スポーツ課提供）

また、踊りには2つの伝説が伝えられています。1つは、海南神社の祭神藤原資盈の奥方盈渡姫が、庶民の娘に教えたというもの。もう1つは、源頼朝が三崎来遊の際、磯取りしていた親子に舞を所望し、母親が唄い娘が舞ったというものです。古代・中世まで遡るかは不明ですが、少なくとも江戸時代中期までは文献で確認されています。

チャッキラコは、年配の女性10人程が唄い、5歳程～12歳までの少女20人程が踊ります。少女は赤色の晴れ着、年配の女性は、黒色の着物に羽織姿で、舞扇とチャッキラコ（写真右下、綾竹）を演目に応じて使い分け、楽器類は伴わず、素唄と囃し言葉だけの素朴な唄と踊りです。踊りには、「はついせ」、「チャッキラコ」、「二本踊り」、「よささ節」、「鎌倉節」、「お伊勢参り」の6種類があります。当日、午前10時頃本宮の祠前で踊りを奉納、午前10時30分頃海南神社境内の社殿前で踊りを奉納します。午後からは仲崎竜神様と花暮竜宮様の祠前で踊りを奉納し、旧家や老舗商店等を祝福して回ります。

現在、「ちゃっきらこ保存会」（昭和39年結成）により継承され、三浦の伝統文化として少女達が受け継いでいます。



三崎昭和館



チャッキラコの衣装



ユネスコ無形文化財登録認定書

（編集委員撮影）

（三浦市ホームページ引用）